

国家運営の軌跡をまとめたハンディな通史

——今井宏平著『トルコ現代史——オスマン帝国崩壊からエルドアン時代まで——』

中央公論新社、2017年1月——



今井宏平

●内容

本書は、トルコ共和国建国の父であるムスタファ・ケマルが、西洋をモデルとした近代化・文明化を達成するために掲げた6つの原則、共和主義・民族主義・人民主義・国家資本主義・世俗主義・革命主義と外交の「内に平和、外に平和」という指針を軸にトルコ共和国の93年間（1923～2016年）の政治と外交の歴史を振り返った作品である。

心掛けたのは、理想と現実の間で政治と外交の舵取りを行う為政者たちの姿を活写することであった。ケマル後の為政者たちは理念型である6つの原則を現実とすり合わせ、マイナーチェンジをさせながらも政治運営の緩やかな指針として活用してきた。それは現在大統領で絶大な権限を持つレジェップ・タイップ・エルドアンも例外ではない。また、外交に関して、内に平和とはトルコ共和国の安定、外に平和とは、「世界平和に貢献すること」ではなく、「世界で平和裏に生存する」ことを意味していた。地理的に様々な地域と隣接しているトルコは、平和を確保するため、常に現実的な対応を強いられてきた。現実主義と全方位外交、それがトルコ外交に通底する原則であった。

●現代トルコに関するハンディな概説書

「あとがき」にも書いたように、本書の企画は、中東に関連する研究者と外務省職員の勉強会のあとの懇親会に端を発している。懇親会の席で外務省の方が、「トルコの現代に関するハンディな概説書がないので、トルコまでの旅程で読めるくらいの新書があれば便利ですね」と発言されたところ、立山良司・現防衛大学校名誉教授が「良かったら今井君が書いてみれば」とご提案してくださり、中公新書の編集者の方を紹介してくださったのが始まりである。とはいえ、当初、私はトルコ共和国の通史は荷が重いと考え、『公正発展党』（公正発展党は、トルコにおいて2015年6月から11月までの一時期を除き、2002年から2017年4月現在に至るまで、単独与党に君臨している政党である。エル

ドアン現大統領の出身政党でもある）という題名で企画書をお送りしたのだが、編集者の方から「やはりトルコ共和国の歴史を俯瞰できるものがよい」と一蹴され、トルコ共和国の通史である本書の執筆を始めた。

本書に価値があるとすれば、それはこの本が生まれる理由ともなった「現代トルコのハンディな概説書」という点だろう。現代トルコに興味を持った者は必ず新井政美『トルコ近現代史』（みすず書房、2001年）および松谷浩尚『現代トルコの政治と外交』（勁草書房、1987年）の薫陶を受けてきた。この2冊は非常に質が高く、現在でもトルコを知るうえで欠かせない文献である。ただし、新井の最も得意とする分野はオスマン朝末期からトルコ共和国初期の時期であるので『トルコ近現代史』もそこに該当する記述が多い。松谷の著書は刊行から30年以上経っており、公正発展党の時代を含む90年代以降の記述はない。また、両書はお世辞にもハンディとはいえない。

近年出版されたトルコを真正面から扱った著作で、ハンディな概説書に分類されるものとしては、新井政美編『イスラムと近代化』（講談社、2013年）、内藤正典『トルコ』（集英社、2016年）、イルテル・エルトゥールル『現代トルコの政治と経済』（世界書院、2011年）があげられる。ただし、『イスラムと近代化』は学術的な色彩が強く、時代はオスマン帝国末期から現代までを扱っているが、特定の 이슈を掘り下げて検証した書物である。『トルコ』は平易な文体で書かれており読みやすく、著者の強みを生かし、トルコ共和国におけるイスラームのあり方とイスラーム政党、特に公正発展党を中心に扱っている。その反面、目配りはしているものの、歴史（2000年代以前）に関する記述が相対的に少ない。本書のスタイルに最も近いのは『現代トルコの政治と経済』である。この本は、1923年から2008年までの85年間を扱い、本書が十分にカバーしきれなかったトルコの経済についての記述も多く、参考になる。ただし、公正発展党に関する記述が少ないのと、著者は左派知識人であるので、分析視覚にやや

偏りがみられる。逆にいえば、トルコの左派知識人のトルコ共和国観を理解するには絶好の書だろう。

このように、本書は中立的な立場からトルコ共和国の政治と外交を分析したハンディな書物がないという状況に終止符を打った。今後より包括的な概説書が出版された際に本書がたたき台となれば幸いである。

●悩ましい内容の取捨選択

執筆において苦労したことは、まず、本書が通史であるという点であった。本書は、オスマン帝国末期から2016年までを扱い、かつ紙面の制限もあったため、どの問題を取り上げるかの取捨選択に悩んだ。執筆を始めるにあたり、中公新書の現代史シリーズの構成を参照した。そして、上述した日本語の概説書、および主要な英語とトルコ語の概説書に目を通し、通史に不可欠な事件は何かを確認した。そうして仮の目次を作成した段階で、今度は自分が取り上げたい事件や問題をそこに加えた。執筆中に取り上げるべき項目が加わったり削除されたりしたのはいうまでもない。

この取捨選択に関しては、同業者からも反響があった。たとえば、いわゆる「アルメニア人虐殺」の問題を取り上げていないとの指摘を受けた。確かに「アルメニア人虐殺」の問題は今日まで続く重要な問題であるが、この問題の起源は、第一次世界大戦期のオスマン帝国の行動に起因する。本書が主に焦点を当てたのはトルコ共和国成立後の時代であったので、オスマン帝国時代に端を発する「アルメニア人虐殺」の問題には触れなかった。ただし、いまだに未解決の歴史問題なので、コラムなどで触れてもよかったと考えている。また、もっと経済や社会に関する記述があってもよかったのではないかとのご意見もいただいた。本書は政治と外交に焦点を当てているものの、経済と社会は特に政治と密接に結びついている。本書でもエタティズムや新自由主義の受容には紙面を割いたが、特に公正発展党政権期の経済に関して、もう少し触れてもよかった。加えて、個人的には公正発展党政権の2007年以降の政治および外交を扱った第7章は書きたい内容が多すぎて、まとまりに欠けた面があった。

●専門書と一般書の違いに戸惑う

研究者である筆者はこれまで研究論文および研究書の執筆を基本的な業務としてきた。エッセイやビジネ

スマン向けの論考は執筆したことがあるが、一般書の執筆は初めてであった。研究論文や研究書は難しいことを難しいまま書くことが可能で（許され）、詳細な情報があればあるほど重宝される。それに対し、一般書は内容をいかにわかりやすく説明するかが求められる。そのため、必要以上に詳しいデータも敬遠される。本書は一章書いた段階で編集者に原稿を送り、赤を入れてもらって再度それを修正するという作業工程をとった。一章分送るときは解放感に満ち溢れ、編集者から原稿が戻ってくるときが一番憂鬱であった。無論、真っ赤になって返ってくるためである。編集の方からのご指摘で最も多かったのは「この文章が一般読者によくわかりません。わかりやすく説明して下さい」というものであった。また、筆者が役に立つと考え、公正発展党の党設立時の党員をリストにして送ると「こんな情報を読者は求めていません」というつれない返信で一掃された。とはいえ、この編集者との絶え間ないやりとり、そして愛のムチ（的確なご指摘）のおかげで、本書は何とか新書としての体裁を保ちつつ、それなりに分かりやすい説明ができたのではないかと考えている。本書の編集を担当していただいた中央公論新社の藤吉亮平氏には感謝の言葉もない。

●今後の研究につなげる

一般書なので研究書に比べ、多くの人の目に留まる機会に与った。高校卒業後、一度も会っていない高校時代の英語の先生から「本を見ました」とわざわざ手紙をいただき、一般書の影響力を実感した。一方で、一般書の執筆はともすると研究活動とは関係ない、場合によっては支障になると考える研究者もいるだろう。しかし、私は「深く掘るには広く掘る」、つまり、研究を深めるには、研究対象を幅広く理解する必要があると考えているので、一般書の執筆も研究の役に立ったと思っている。それを実証するために、今後より一層研究活動に邁進していきたい。

(いまい こうへい／アジア経済研究所 中東研究グループ)